

絵のない絵本

解説

矢崎源九郎

青空文庫

アンデルセンといえば、おそらくその名を知らない者はないといつてもよいであろう。ことに童話詩人としての彼のかれの名前は、われわれにとつてはなつかしい響ひびきを持っているのである。しかし彼は単に童話を書いたばかりではない。小説に戯ぎ曲きよくに詩に旅行記に、じつに多方面にわたつて筆をふるつている。なかんずく、イタリアの美しい自然を背景として美少年アントーニオと歌姫うたひめアヌンチアータとの悲恋ひれんをえがいた『即興詩人そつきようしじん』のごときは忘れがたい作品の一つであるといえよう。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

——われわれはいつのまにかアンデルセンと呼びなれているが、

これはわが国独特の呼び方であろう。いったいに外国の発音をカナで書き表わすことは不可能であるが、デンマーク流の発音はアナスン、アネルセンに近い——は一八〇五年四月二日に豊かな伝説と古い民謡みんようとに恵めぐまれているデンマークのオーデンセという町に生れた。生れ故郷のオーデンセは、ブナの木のエのあいだに麦やウマゴヤシの畑がかぎりなく続いているフーン島という美しい緑の島にあつた。父は貧しい靴職人くつであつたが、折にふれて幼いアンデルセンにおとぎばなしや物語などを読んで聞かせた。文学への興味はこのころの父の感化によつて芽生めばえたといつてもよい。母は働く一方の女で学問はなかつたが、深い信仰心しんこうしんを持つていた。このふたりのもとに、幼いころはともかくも幸せしあわな日

々を送ることができたのである。しかし、十一歳さいのときに父を失うに及およんで、この幸福の夢ゆめもはかなく消え去つてしまった。母は仕立屋の職人しきたりにしたいという希望を持っていたが、アンデルセンみずからは舞台ぶたいに立つことを望んで、十四歳のときただひとり首都のコペンハーゲンをめざして旅立つた。このときから彼にとつて新しい世界が開かれるとともに、茨いばらの道がはじまつたのである。すなわち都に出るには出たものの、何もかもが彼の希望に反してしまった。俳はい優ゆうとして舞台に立つこともかなえられず、持つて生れた美声を頼たよりに志望した声楽家にもなることができないままに、いくどか絶望のどん底におちいった。しかし幸いなことにも、一生の恩人であるコリンに見いだされたのはこのような失意のと

きであった。それまでは学校教育もろくに受けておらず、物を書くのにも綴りつづりがまちがいだらけというありさまであったが、このコリンの助力のおかげで学校へも行けるようになったのである。

アンデルセンは一生のあいだ旅から旅へとさすらって歩いた。

旅こそは彼から切り離はなすことのできないものであった。一八三一年に初めて国外への旅行を行い、つづいて一八三三年にはドイツ、フランスをへてイタリアへの旅にのぼった。このときの旅行のあいだに、その印象をもととして書いたのが『即興詩人 Improvisatoren』(一八三五年)であつて、この作によつて初めて彼の名は国の内外に認められるようになった。『ただのバイオリン弾ひき *un en Spilmand*』とか、()に訳出した『絵のない絵本 *Billedbog*

uden Billeder』や、『スウェーデンにつ I Sverige』、『わが生^{しょうが}涯^いの物語 Mit Livs Eventyr』をはじめ、彼のほとんどすべての作品はこのとき以後のものである。童話についても同様、『即興詩人』が出版されてから二、三カ月後にはじめて第一集が出、それから一八七五年八月四日に永眠^{えいみん}するまでに百五、六十にも及ぶ多数の童話が書かれたのである。

『絵のない絵本』は、一八三九年から四〇年ごろを中心にアンデルセンの創作意欲の最も盛^{さか}んなときに書かれたものである。初めて本になったのは一八三九年十二月二十日で、(表紙の日付は一八四〇年となっている)そのときはわずかに二十夜を含む^{ふく}ごく小さい本であった。この二十夜のうち五編はすでに一八三六年に文

学誌『イリス（虹にじの女神めがみ）』第二号上に発表されている。たとえば同誌に掲載けいさいされている『フランス国の玉座の上の貧しい男子』というのは第五夜の物語である。一八四〇年にはさらに数夜が発表されたが、一八四四年の第二版においてようやく三十一夜を包ほうかつ括するにいたった。第三十二夜と第三十三夜は一八四八年に初めて公おおやけにされたものである。したがって一冊のまとまった本として現在のように三十三夜全部を含んだのは、一八五四年に発行された第三版が最初である。初版から三版までに多くの歳月が流れているのは、この本がデンマークにおいてはあまり問題にされなかったためであろう。つまり、この本も『即興詩人』の場合と同様、本国におけるよりもむしろドイツや英国などにおいて評

判となったのである。

『絵のない絵本』はこのように小さいにもかかわらず、きわめて多彩たさいな素材を含んでいる。その大部分がアンデルセンみずからの体験や印象にもとづいていることはいうまでもない。すなわち、第五夜は一八三三年のパリ滞たいざい在中の体験から、第六夜は一八三七年のスウェーデン旅行の印象をもととして書かれたものである。第十五夜のリユーネブルク、第二十五夜のフランクフルトには一八三三、四年おとすに訪れている。一八三三年から三四年にかけてのイタリア旅行の印象は第十二夜、第十八夜、第二十夜などにあらわれている。なかでも、暗い北ほくおう欧生れのアンデルセンがあこがれてやまなかつた明るい南の国イタリアは、この本においても最も

多く描^{えが}かれていますのである。

また一方においては空想の翼^{つばさ}に乗って、遠くインドをはじめ、グリーンランドやアフリカ、中国にまでも思いを馳^はせている。それらは第一夜、第九夜、第二十一夜、第二十七夜となつてあらわれている。そのほか子供についての話は六つほどあるが、それを描くのにあたたかい優^{やさ}しい感情をもつて、しかも明るいユーモアを忘れていないところはいかにも童話詩人らしい。さらにまた諺^{ことわざ}にあふれたもの、あるいは苦惱^{くのおう}にみちたものもあり、人生の一断面のスケッチもある。小さい本ながら、まことに盛り^もりたくさんである。しかもこの本は、月が絵かきに物語る話という形を取つてはいるものの、その特^{とく}徴^{ちゆう}とするところは絵画の素材を

与^{あた}えるための、眼まぐるしいばかりの場面の展開にあるのではない。一つ一つの短い物語の底に流れる、絵を絶した^{ローマンてきかお}浪漫的香りも高い詩情こそその生命なのである。

翻^{ほんやく}訳のテキストとしてはコペンハーゲンの Gyldendal 書店から一九四三年に発行されている H.C. Andersens Romaner og Rejse skildringer (小説、旅行記集) の第四巻に収められている Billedbogen uden Billeder を用いた。ただ、年少の読者にも読みやすいように、改行を多くしたことを一言おことわりしておく。

(一九五二年六月二十六日)

青空文庫情報

底本：「絵のない絵本」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年8月15日発行

1987（昭和62）年12月5日66刷改版

2005（平成17）年8月10日99刷

入力：sogo

校正：諸富千英子

2018年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

絵のない絵本

解説

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>